氈用法

〔内裏式上〕元正受群臣朝賀式

少納言氈於南榮、當第一第二楹間、每座相對、○略中　次少納言二人分入自昭訓光範兩門、對立氈上、兩氏○大伴佐伯　降壇、北面立門下、

〔日本書紀二十九天武〕十年四月辛丑、立禁式九十二條、因以詔之曰、親王以下至于庶民、諸所服用、金銀珠玉、紫錦繡綾、及氈褥冠帶、并種々雜色之類、服用各有差、

〔太平記二十四〕天龍寺供養事附大佛供養事

此上ハ武家ノ沙汰トシテ、當日ノ供養ヲバ執行ヒ、翌日ニ御幸可有トテ、同○康永四年八月二十九日、將軍○足利尊氏　并左兵衛督○足利直義　路次ノ行粧ヲ調テ、天龍寺ヘ被參詣ケリ、○略中　佛殿ノ北ノ廊四間ヲ飾テ、大紋ノ疊ヲ重テ布キ、其上ニ氈ヲ被展タリ、平敷ノ御座其北ニアリ、

〔相國寺供養記〕明德三年歲次壬申八月廿八日丁丑、今日萬年山相國承天禪寺供養也、○略中　次鋪筵道、其上鋪地鋪氈、掃部寮役之○略中　次請僧十口解經紐、法華經一部十卷　先曲祿十脚、各懸氈○下略

〔甲陽軍鑑二十品第五十七〕勝頼公御頸はじめは見えず候、子細は、小原丹後、御女房衆を介錯仕り、其後毛氈をしき、腹をきりたる頸を取て、勝頼公の御證と申て、小原が頸を公卿にすへ候へ共、尾張牢人關甚五兵衛と申者、○略中　能見しりて、勝頼公の御頸をえり出し、小原丹後が頸をすて候、

氈雜載

〔玉露叢十〕一寛永十二年正月廿八日ニ、二ノ丸ニ於テ、將軍家家光公ヘ仙臺ノ政宗御膳ヲ上ラル、○略中

一御慰トシテ御能アリ○略中

一御舞臺ノ御正面ヨリ御左ノ方ニハ、御白洲ニ毛氈ヲシキ渡シ、大小名ヒシト列座ナリ、

〔甲陽軍鑑十一品第三十七上〕一駿河田中御逗留の間に、織田信長より、佐々權左衛門使者にて、御音信、からのかしら二十、毛氈三百枚、○略下